

県外からの招へい医師の活躍



岩手県盛岡広域振興局保健福祉環境部・県央保健所
仲本光一 所長【神奈川県出身】

消化器外科医として勤務後1992年に外務省入省。20年に渡り在外医務官として活動し、外務省本省診療所長を経て2019年に岩手県入庁。奥州保健所長、一関保健所長などを経て2023年より盛岡広域振興局保健福祉環境部技監兼県央保健所長。

住民の健康に寄与する公衆衛生。 多岐に渡るからこそやりがいもある。

神奈川県で消化器外科医として勤務したのち、35歳で外務省へ入省。医務官としてミャンマーをはじめ、インドやニューヨーク、カナダなどの大使館や総領事館で20年勤務しました。在外医務官は様々な対応が求められ、度胸もつきましたし、困難を抱えた人に寄り添う心療内科の重要性にも気づきました。

公衆衛生全般を扱う保健所の仕事もまた、疾病予防や感染症対策をはじめ、事業者への安全対策や衛生指導のほか、精神疾患や介護者・難病患者支援、病院への指導や環境政策など、実に多岐に渡ります。新型コロナウイルス感染症への対応では、疫学調査や入院調整など多忙を極

めました。幸いにも岩手県は各地の県立病院が緊密に連携しており、情報共有はもちろん各病院の医師や医療従事者による現地訪問など柔軟な対応が行われました。それは、東日本大震災津波を教訓に、全国に先駆けて感染症コントロールチームが誕生した岩手だからこそ。県立病院を軸に、命を守るという高い意識を持ったメンバーが揃っています。

医者は皆、誰かのために役立ちたいと業務に当たっています。私たち保健所に勤務する公衆衛生医師は、患者個別の症状に向き合う臨床医と違い住民の健康に寄与すべく働いています。通常業務のほかに啓発活動などを通して住民と触れ合う機会もあり、直接感謝の言葉を頂くことも多々あります。

公衆衛生とは住民に直接届く仕事です。「ありがとう」と言ってもらえる、それは医師として大きなやりがいです。

岩手県職員（公衆衛生医師） の募集について

岩手県では、保健所又は県庁で公衆衛生医師として勤務して下さる方を募集しています。公衆衛生に関心を持ち、保健所長として御活躍いただける方及び本庁保健福祉部等で地域保健に関する事業の企画調整・業務管理等に従事していただける方の応募をお待ちしています。

詳しくは、右記二次元コードから岩手県ホームページを御確認ください。



【本件に関するお問い合わせ先】
岩手県 保健福祉部 保健福祉企画室
電話：019-629-5405



岩手県立山田病院
鈴木宏昌先生【東京都出身】

筑波大学医学部を卒業。震災当時は茨城県の茨城西南医療センター病院の救命救急センター長を、DMAT後は帝京平成大学の教授に就任。2021年4月より、県立山田病院総合診療科に勤務。

DMATで知った山田町の現実と課題。 医師として地域の役に立ちたい。

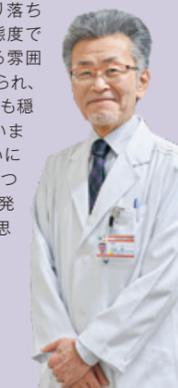
東日本大震災発生直後からDMATとして山田町へ。私は長く救命救急医療に携わってきたのですが、今回のような津波災害では治療すべき負傷者はほぼ皆無で、入院患者の搬送に明け暮れました。任務終了後は大学で教鞭を執っていましたが、「あの時、他にできることはなかったか」という思いが常にありました。その後も山田町を何度か訪れましたが、建物は新しくなっても地域の復興にはほど遠い。そんな時、岩手県が65歳以上の「シニアドクター」を募集していると知り、自分にできることがあればと思い手を挙げました。

岩手県に来て感心したのは、県立病院が地域の基幹病院として機能し、県内26カ所の県立病院をつなぐ医療ネットワークシステムが構築されていること。どの病院からでも患者の検査データやレントゲン、CTや診療情報まで閲覧することができ、その患者がどんな状態だったか、検査や治療を受けて経過はどうだったかを転院先でも詳細に把握できるのです。震災時に全国から応援医師の受け入れがスムーズに進んだのもこのシステムが機能したからですし、県単位でこんなネットワークを実現できていることは本当に素晴らしいです。

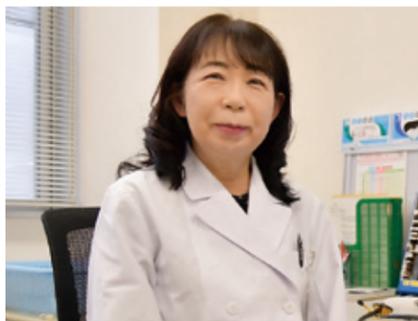
社会が多様化するなか、どんな場所でどんな風に働くかは個人の自由です。年齢を重ねてなお私のように現役医師として働くのも、これからの生き方のモデルケースになるかもしれません。

病院長Message

長年救急をやってきた鈴木先生は、短い問診のなかで患者情報を的確に引き出し、適切な対応をとることができる方です。なにより落ち着いた話し方や態度で相手を安心させる雰囲気や身につけておられ、患者やスタッフとも穏やかに交流しています。今後もお互いに切磋琢磨し合いつつ、岩手の魅力も発信していければと思います。



岩手県立山田病院
院長 阿部薫



盛岡市立病院
加藤智恵子先生【宮城県出身】

岩手医科大学に進学、第一内科と大学院で研鑽を重ねる。山形県立中央病院を経て、富山大学第三内科（消化器内科）ではヘリコバクター・ピロリ感染症の治療ガイドラインづくりに携わった。

医師の経験と知見を故郷のために。 つながりを実感しながら患者に向き合う。

幼少期から盛岡で暮らし、岩手医科大学に進学し、大学院での研究と病院での研修を重ねました。

その後は富山大学第三内科に勤務、富山時代は研究テーマであるヘリコバクター・ピロリの除菌による胃がん抑制効果を検証していました。充実していましたが、研究に一段落が付き、次は故郷のために働きたいと思うようになりました。岩手県医師支援推進室は、富山赴任当初より定期的に岩手県内の病院の情報を知らせてくださっており、岩手での勤務先を検討するにあたり、たいへん助かりました。岩手医大の医局の先

輩である加藤章信院長からもお声がけをいただき、盛岡市立病院に勤務することになりました。

久しぶりの盛岡ですが、院内には先輩や同級生がたくさんおり、開業医の先生も専門を含めてよく存じ上げているので、患者さんの紹介もしやすいです。勤務する市立病院もとてもアットホームな雰囲気です。例えば消化器内科を受診した患者さんが、血液検査やX線検査で消化器疾患以外の異常があるとき、医局で昼食をとりながらどのような対応がいかなど専門の先生に気軽に相談できます。そのような風通しのよさがとてもよく、医師として働きやすさを感じています。

ヘリコバクター・ピロリについては研究が進み、すでに除菌治療も保険適用になりました。未だ胃がんの罹患者は年間12万人以上います。少しでもこの数を減らすため、専門医として啓発に取り組んでいこうと考えています。

病院長Message

智恵子先生は、日本のヘリコバクター・ピロリ感染症のオピニオンリーダーの一人。当院では啓発も含めた健診活動にも取り組んでいただき感謝しているし、医師や職員同士の「和」を大事にするという病院の理念をよく理解してくれています。当院の目指す「治し支える医療」を実現していくためにも欠かせない方です。



盛岡市立病院
院長 加藤章信